

1 「知性の自由」を求める教育

中 尾 ハジメ（京都精華大学大学院人文学研究科・教授）

■ ■ ■ 「知性」「自由」「教育」

中尾ハジメです。今日は断片的なことしか言えないなと思ってきましたが、お許し願いたいと思います。

タイトルが『知性の自由』を求める教育」とはなっていますが、ストレートではないですね。たとえば「知性の自由」であれば、それはわかる。それでも、よくよく考えてみたら、知性は知性で、自由は自由でしょう。知性ということを考えるならば、ひとつのまとまった話ができるだろう。自由という問題、いま俺たちは自由じゃないぞということ主張するのであれば、それはそれで、ひとつのまとまった話になるだろう。ところが、どうやら「知性」が「自由」でない状態が想定されているのですよね。それに加えて、その「知性」と「自由」のあとに、「教育」ということがついているので、これはとても厄介な考えをつくり出さなければならぬことになります。

「教育」がテーマになるのは、ここにいる皆さんが、自分たちより若い世代を相手にして教育をしている人たちだからですね。それで、ものすごく間接的に、重層的に、「知性」の、「自由」を、求める「教育」、ということになってしまっている。嫌味な言い方で、ごめんなさい。

しかし、これは、ほんとうに大問題で、われわれの世代が知性もなければ、自由でもなければ、どうやって若い世代にそんなことを教育することができるだろう。そういう大問題なんですよね。しかし、そういうふうに考えて、何もしないわけにもいかないので、中村さんとか足立「正治」さんは、いろいろ苦しんでいるんだろうと思います。

さて、今日の新聞を見ると、どの新聞を見ても同じようなものです。これは『毎日新聞』ですが、第一面の見出しはこんなものでした。「欧州安定基金強化」、それから「光より速いニュートン相対性理論を覆す可能性」、それから「福島の米から五〇〇ベクレル」。皆さんはこの新聞紙面をどういうふうにとらえたか知りませんが、ぼくの知性―まったくたいしたものではない知性ですが―では、ぜんぶひとつの問題なのです。もう、人間の世界はだめかなと思えてしまうのです。

まずつけ足しておきますが、ヨーロッパの財政危機、あるいは金融危機という問題。第二次世界大戦を最後に、それ以降は、致命的な経済恐慌を起こさないよう経済活動をあの手この手で意識的に制御する知性がずっと働きつづけてました。日本では、ご存知のように、池田勇人内閣の経済政策に代表される、有効需要の計画的創出と維持によって成長しつづけることを選びとった、あの、平和な経済を求める知性です。とりわけふたつの大戦を経験したヨーロッパでは、国と国が戦争で争いあうことのない経済共同体を目指し、ユーロという通貨の共同体までつくりましたところに進んだ、あの知性でもあります。

ニュートリノというのは、素粒子のひとつですよ。その粒子ということばが、これまたよくわからないのですが、光より速いと書いてあることからわかるように、光も粒子だというふうにとらえている。粒子が飛んでいくんですよ。そうですね。素粒子というのは、皆さんご存知だと思います。物というのはどれくらい細かく分割できるか、皆さん小生がぐらいたと考えるでしょ。長さということ、たとえばこれが一センチとか、それが一〇〇集まると一メートルだとか、考えるでしょ。一センチを一〇分割すると一ミリ。一ミリをさらに一〇分割することはできますよね。それは、どこまでできるんだろつか考えたことはないですか。その長さというのは物を測る物指しでしょ。それは、どこまで細かくできるんだろ。数学的考えからいえば、無限にできるわけです。でも、おそらく物質はそうはいかんだろとも思うのですが、素粒子というのは体積がゼロであるという考えだともいえますね。皆さんは、記憶からは消えてしまっているかもしれないけれども、小学生ぐらいのときに、そういう不思議なことをちょっと考えはじめたかもしれない。で、乱暴な話ですみませんが、その行きつく先が、こういう、ニュートリノが光より速い、というような世界でしょう。

そして、最後のつけ足しですが、米に五〇〇ベクレルの放射能が検出されたという問題。このベクレルという単位は、物質の最小単位だった原子を、それを構成するさらに細かい要素にまで分けて考えるという知性のつくり出した計測単位のひとつです。言うまでもなく、その知性が、原子核の分裂を、またその分裂の連鎖反応を起こすことに成功し、分裂による生成物質、つまり放射能を大量につくり出してしまっているというわけです。

こういう、人間の脳みそがいろいろな働いてしまうということ、つまり知性によって、人類はいままで生き残ってきたんです、まちがいない。で、肉食動物をも食べてしまう、つまり百獣の王人間になっちゃったんですね。普通の動物だったら、いくら子どもを産んでも、その人口は増えないはずですね。ほんとかどうかよくわからないが、つまり生態系とか食物連鎖という考え方があって、そのなかでは食ったり食われたりしながら、それぞれの生き物の種の数が安定し、全体としても調和し、安定しているという考えですね。

人間の歴史ということを考えてみたら、クロマニヨンあたりからだと二万年とか、そんなものですか？ほんとに短い短い歴史だと思います。その人間の人口の増え方というのはすごい。しかしいまだに、動物として残っていくための戦略で、ひとりの女性が生涯に産むことのできる子孫の数はかなり多いという、生物学的な可能性は、保持している。それなのに、この子孫を産む可能性をフルに使う必要はもうなくなりました。それから細胞の再生産の能力としてみることのできる寿命を考えても、一〇〇歳以上の人がたくさんいるようになった。日本には一〇〇歳以上の人がどれくらいいるのですか？万の桁でしょうね。

その人間は、他の動物はけっしてしないことですけど、地中にある鉱物、石とかを燃やしたりする。地表にある物に火をつけたりすることも、それは人間だけじゃない。そういうのが、知性なんです。知性なんです。この知性を際限なく自由にしたら、生態世界の掟やぶりで、他の生物種を手近なものから絶滅させ、結局は自分で滅びてしまっだろう。そういうことが意味されているのですよね。

しかし、おそらく中村さんや足立先生が考えている「知性の自由」というのは、そういう次元のことではなくて、今の、それこそ目の前の社会状況のなかで、どんなふうにして自分たちが不自由になっているのかということを、まず反省しようということだろうと、私は勝手に解釈しているわけです。

もう少しつけ足して言えば、たとえば放射能汚染の現実には、いったいどう向かいあったらいいのだろう、人類として、社会として、あるいは地域に生きる個人として行動するための、指針となる知識や理解というものがあるとすれば、それはどんなものだろう。また、科学技術という人間の知性がつくりだしていった、このような状況そのものから脱却し自由になるために、知性が働くとしたら、それはどんな知性なのだろうか、という問題なのだろうと解釈しているのです。

■ ■ ■ 知るこゝと、考えるこゝ—あの日から、そしてこれから

先ほど中村さんが言っていましたけれど、あの三、一から、ぼくもほんとうに右往左往しました。右往左往というより、もうテレビとパソコンの前に縛りつけられて、動けなくなっていました。便所にいつていたら、その間に何か大変なことになるんじゃないか。夜、眠れないんですよ。そんなふうになって、それでなにか役にたつか。たつけないですよ。だめなんですけど、そういうふうには行動できないんです。そこからわかることは、それでも知性に頼っているんですね。知るといふことに頼っている。知りたいからテレビの前にいるんですよ。

だから、皆さんは、あの一週間、どんなふうにして過ごしたか思い出してみてください。一週間じゃありませんね。三月いっぱい、ほんとうにもう、どうにもならなかったですね。ということ、思い返していただきたいのですが、いまだに、急激に大規模に大変なことが起こるということはないだろうけども、いつ何時、どこで何が起こるかわからない。つまり、福島だけではない、ということが、いまだに続いていて、そうすると、あの三月一日に覚醒したある種の恐怖の意識が、いまだに消えていかずに、馬鹿げているんだけど、毎日毎日、新聞を買っているんです。

ちよつとそのことを振返ってみましょう。三月二日の福島第一原発一号機の水素爆発をテレビで見たという人はいますか。三月一四日、こんどは三号機が爆発しますが、それをテレビでご覧になった方いますか。

一号機のほうは省略をして… これを見たことはありますか？（三号機が爆発をするニュース映像を見る）もう一回見ましょう。

これは、オーストラリアのテレビ局が流したものです。しかし、テレビカメラそのものは、オーストラリアの局のものではないですよ。カメラが据えられていたのは、一セキロぐらい離れている所なんです。

「中心部の爆煙は」きれいな球形になっています。「その周囲に水平の輪状の爆煙が見える」渦といったらかしいですが、ドーナツ状のものが瞬時にできます。これができるスピードを知ろうと、一秒間に一五〇メートルですから、それで測ると一五分の一秒ぐらいでいっぺんに二〇〇メートルぐらいの大きさの渦のようなものがだっと形成される。「爆煙が」あつというまに登っていくでしょ。さっきできた渦のようなものは、これだけ上昇している。この鉄塔、排気塔が二二〇メートルぐらいです。いま（球状の爆煙は）これぐらいの大きさ。何の球かという、中はものすごい高温状態です。最初の段階では炎が見えましたね。あの炎の大きさはどれぐらいか。あの原子炉の建屋そのものが、地上にでている分だけで高さ五〇メートルぐらいある。横幅が四〇メートルか四五メートルで、炎の大きさを見ると、四〇メートルは充分あると思う。それがパッと一瞬見える。一瞬しか見えない。どういふことかといえば、それは爆発だからです。一号機建屋の水素爆発では、明るい閃光は見えたけれど、こんな黄色の大きな炎は見えない。

次に、こういう、いわゆるキノコ状の雲ができる。雲の外側が上から下へぐるぐる回ってきますね。対流が発生している。まん中は高温状態で、そこから出た熱が外側を回って、また下から入っていく。もう、ここで見えています。こういう巨大な落下物があるでしょ。三〇メートルぐらいの長さの、大きな落下物です。それが上から落っこちてくる。どれぐらいの高さからかというと、「爆煙の頂上は」たぶんすでに四〇〇メートルぐらいまでいっていますね。

「この映像は」高い所から望遠でとっているのは福島中央テレビというところですね。福島中央テレビが他のテレビ局にこれを売っていたんです。NNN、つまり読売系ですが、そのニュース番組はこれを流しました。どの局も、あのときはスタジオからの実況中継で、津波のことから、原発のことから、専門家を入れて、一日中やっていました。そこにこの映像が出ました。つまり、NNNという日本テレビ系では、爆発直後だけはこの映像を流したところが、日本国内では、ほかの局のニュースにこの映像が出ることはなかったのです。爆発があったことを報ずるNHKのニュースに出たのは、一、二時一十分ごろといわれる爆発時の映像ではなく、一、二時八分ごろの、こわれた建屋の上に蒸気の白煙が見えるだけの映像でした。

さあ、ここでよく考えなきゃいけない。

もしこれを東京の人たちが見ていたら、なにが起こっただろう？ 皆さん東京に住んでいるでしょう。さつきぼくは池袋の駅を歩いてきたんだけど、おそらく池袋の駅を利用する人は一日で何十万人ですよ。万の単位ではなく、何十万人。それが池袋だけじゃない、東京中そういうふうになっていて、あの帰宅難民が発生したのが三月一日。おそらく皆さんも、一日には大変な地震があり、東北は津波が襲ったということを知り、なんとか自分の家にたどりついて、ほかに退避する場所もないですから、おそらく電気がついていたらテレビに、心配で、張りついていたでしょう。そうやってテレビを見ているとき、もし、こういう映像が映ったら、どうしました？ もう一度見てみましょう。(三度、スクリーンに爆発映像)

これを見たら、われわれの知性はどうしたらいいんだろう。当たり前のことですけど、何かしなきゃいけないですよ。非常にまっとうな反応としては、逃げようと思います。ところが、東京でみんなが逃げようと思えば、それは、皆さんが帰宅難民のときに経験したようなことが起こる。結局は逃げられない。でも、逃げられなくても、逃げようとしなないということが、はたして正しい選択かどうか。たしかに逃げられっこない。でも、少しでも、できるだけ時間のたないうちに、少しでも遠くに……。このあいだの台風のとくも、賢い会社は「出社に及ばず」ということにした。そういう対応の仕方もあるかもしれないのですが……。しかし、あの映像をテレビで見てしまい、風向きが変わり東京に向かって放射能の雲が流れてくる可能性があることを考える人がある程度いたならば、いずれにしても、東京のパニックは避けられなかったでしょうね。

そして、少し考えてほしいのは、あれ以来、ぼくたちはいったいどういうことを使って、あのときの体験とか、これから起こるであろう次の危機の問題を、考えるのかということです。考えるということまではいかないかもしれないけれど、とりあえず、どんなことを使って処理しているか。

たとえば、SPEEDI(スピーディ)ってご存知ですか。これは二〇億円かけてつくったスーパー・コンピュータ。原子力発電所で何か起こったら、どっちから風が吹くかとか、気象条件などが入力されます。よつするに、放出された放射能がどういう風にのって、どこに飛ぶかということが、これで予測できるという仕掛けなんです。で、政府は

SPEEDIの情報をださなかったということ、怒られていますよね。おそらく皆さんのなかにも、けしからん、SPEEDIを見せなかったのはけしからん、と言った人がいると思います。いませんか？

ちょっと考えてみたいんです。もし、SPEEDIの予測をリアルタイムで、東京の人たちが見ていたら、どういうことになったでしょうか。そしてまた、いま、SPEEDIの情報をださなかったのはけしからん、と言っているわれわれは、いったい何を知り、何を考えようとしているのでしょうか。

■ ■ ■ いじりばを使うこと

ぼくは、もうひとつ用意してきました。いま出ている『週刊文春』。こういうページがあります。「東電が国会に提出したまがまがしい黒塗りの資料」というタイトルがあります。ちょっと読みますね。「念のため言っておけば、この資料には棒グラフが描かれているわけではない。そうではない、これは事故の時の運転操作手順書…」なんです。その手順書通りやったかどうかということを、国会の衆議院科学技術・イノベーション推進特別委員会というところが、調べるから資料を出せと言ったら、じゃあ出しますということまで出てきたものが…。紙は確かに出てきたんだけど、黒塗りだった、と。見たい人がいたら見てください。

それを『週刊文春』がどういうふうに書いているかというと、「都合の悪いことは隠す隠蔽体質」。これは東電（東京電力）の体質だ、困ったものだ、こういうものはけしからんと言えば、ぼくらとしては言うべきことを言ったことになり、それで終わってしまふ。

知るとか、考えるということをしようにしている、われわれにとって、「隠蔽体質」ということばを使うことは、どういう意味をもつのだろうか。じつは、何も知らずとしてないし、何も考えていないのではないか。つまり、むしろ後ろ向きなんじゃないかと思わざるをえない。考えたくないという心の動きって、あるでしょう。考えたくない、それから、知りたくない。こういう心の動きは、自分でも許すのですが、信じないという心の動きは、それを自分に認めることはむずかしいでしょう。何かを信じていなければならぬからです。それで、何かを信じているのですが、考える

か知るとか言っている場合じゃないだろうと、じつは考えることから逃げてしまっているのですね。

「隠すのはけしからん」という人が、ほんとうに知って考えたいから、そう言っているかどうか、問題なんです。東電は隠蔽体質でけしからん、と言ってる人のなかで、どうしてあんなふうに隠さなくてはならないのかという問いは、ほとんど消えてしまっている。意味のあることは全部消えちゃっている。これについては、例の松本「純一」さんかな、東電のスポークスマンをやっている彼は、企業秘密の部分もあるし、それにテロを避けなきゃいけないから、ここに書かれている情報は隠すしかないと断言している。そういうことはないだろうと、ぼくらが言うなら、出せ出せと言いつづける以外に、そういうことはないかどうかを調べなければならぬ責任が、ぼくらに発生するんです。

それでは、どうやって調べるのか。ほんとうに知るといふ方向で、隠蔽の構造があるにちがいないと推測するところには進んだけど、その調べる方法もっていないのです。だから、責任を感じても、その責任をはたす能力がなく、あるいはそういう能力をもった社会組織が存在しないので、もう駄目じゃないかという感じがします。

もうひとつ例をあげましょう。「安全神話」ということばがありますね。なんでこんなことばを、だれがつくったのか、と思いませんか？でも、かなりの人たちは「安全神話」ということばを使っているのです。いままだ進めてきた人たちも使うし、反対をしてきた人たちも使えます。だいたい、「神話」ということばの意味あい、まったく違ってしまっていますね。つまり、昔の意味での「神話」的なものなんて一切信じていない人たちが、なんで「神話」なんていうことばを使うんでしょうか。何の物語性もないものに、なんで「神話」なんでしょうか。

冗談じゃない。ああいうのは「洗脳」って言うんです。なんで「洗脳」って言わないの？「洗脳」って言えばものすごくはつきりするでしょう。洗脳してきた人も、「すみません、洗脳しました」って言えるじゃないですか。されたほうも、「ああ、そうか俺たちは洗脳されていたんだ」って言えるでしょう。なぜ「神話」ということばを使っているのか。ぼくたちは、「神話」に向かって抗議することが出来ない。というわけで、「安全神話」ということばを使って批判的な立場を表明するということとは、じつは、実質的なことは何も「考えたくない」という側に入るでしょう。

わっきの SPEEDI の件も、じつはそんなんです。SPEEDI を出さなかったのはけしからん、と後の祭の議論をする。出してたら、どうなっていたと思いますか。そもそも、原子力発電所に事故が起きて、とんでもない破滅的な事態にな

る進行の速度というのは、われわれが日常生活をやっている対応できるものじゃない。そういうことを考えてみれば、出さなかったことはしからんと言っているだけで満足しているというのは最低だよ。冗談じゃない。そりゃ出したらいですよ。しかし、それこそ、いましなねばならないことは何だろう。やったからといってどうにかなることではないけれども、いまいちゃんしなければならぬこと、機械を使わなければならぬことは、線量を測ることだよ。実際、SPEEDで積算線量やら土壌汚染やらの予測地図を作りました。でも、その地図と、飛行機で測った地図はやっぱ違う。だったら、いま皆が一生懸命言わなきゃいけないのは、もっともつと測れ、もっと測れ、ということですよ。なんで、いま、そんなにSPEEDの話題で盛り上がっているのか。…という具合に、じつは、SPEEDを出さなかったと怒ることは、考えない、知らない、何もしようとしない、という方に入ってしまう。

こんな具合に、ほんとうに、俺たちは何て馬鹿なことをしているんだろう、という例しか出てこないのですが…。

それから、「原子力村」ということばがある。「原子力村が悪い」なんてね。このなかで原子力村に住んでいる方、いらっしゃるんですか？「原子力村」という捉え方をして、いったい誰を指しているんでしょうね。班目「春樹・原子力安全委員会」委員長とか、学者先生とか、そういう人たち。それから官僚、経済産業省。それから、ずっと原子力推進政策をやってきた元凶の自民党。こういうのが「原子力村」を構成することになっている。とりわけ東京大学工学部原子工学科とかね。そういうことを言いますよね。たしかに、そういうふうに言われてみたら、ああ、なるほどそういう地図か、ということのはわかります。しかし、たとえば外国に向かって、日本には「原子力村」ということばがあって、「ああ、原子力村なんだよ」としゃべるといって、そのことがどういう効果をもっているか、意味をもつことができるか、について考えましょう。

配つてある『産経新聞』の「コピー」を見てください。「野田首相国連原子力安全会合の発言要旨」。産経でなくても、どの新聞でもこうです。三段目のパラグラフ。「日本は事故のすべてを迅速かつ正確に国際社会に開示する」

—「事故のすべて」とはいったい何だろう。

「事故調査検証委員会が来年には最終報告を示す。事故の教訓を世界に発信する」

—「事故の教訓」とはいったい何でしょうか。皆さんはどう考えているかわかりませんが、ぼくは事故の教訓は何

かというところ、原子力には手をつけないということだと、そういうふうな受けとていますが、野田「佳彦」首相はどういうことを意味してこれを言っているのか、ちっともわかりませんね。

「原子力利用を模索する国々の関心にこたえる」。ええっ、原子炉を、ベトナムにも、トルコにも、インドにも、中国にも輸出します、と。「エネルギー安全保障や地球温暖化防止のため、新興諸国をはじめ、世界の多くの国々が原子力の需要を真剣に模索し…」

—「真剣に模索し」とは、どういう意味でしょうか。「我が国が原子力安全の向上を含めた支援をしてきた。」
—すこいですね。安全の支援をしてきたと言い、これからも、こういう国の関心に応えていきます、と。

さて、この野田首相は、「原子力村」のメンバーだったのでしょうか。皆さんのなかでは、さっきの「原子力村」には野田首相は含まれていなかったのではないのでしょうか。「原子力村」ということばを使っても、野田首相は含まない、潘基文国連事務総長も含まないのでしょう。でも、潘基文は、日本はもっと原子力で世界に貢献してくれと、貢献しろよと、言ってきたんですよ。それで潘基文の出身国の韓国の大統領李明博は、日本で何が起ころうとも、原子力を推進するほか、我々にとっては安定した社会をつくる方法はないと言っています。そして、相変わらず北朝鮮はどう言っているかというところ、北朝鮮はウラン濃縮をやめないぞ、と。ウラン濃縮をやめろということがもし六か国協議の前提にあるならば、そんなものには参加しない、ということと言っているわけです。どういふことはいうのかという、「原子力村」なんていうことばから考えられるような生易しい話じゃないよってことです。

—こういうふうな考えていくと、あの、皆から、駄目だあいつはとか、このうそつきとか、リーダーシップも何もないとか、いろいろ言われていた菅直人首相が、なんで孤立しちゃったかということがよくわかると思う。あれは、「村人」にはなれない、ということなんでしょう。菅首相は去年の一月ぐらいに、ベトナムに前原「誠司」外務大臣と一緒に原子炉を売りに行ってたんですよ。そのことが新聞にでかかちやうった。でも、彼は偉いんだよ。彼は辞める前に原子力輸出についても見直すと言った。そう言われたらほかの連中がね、あんた見直すって言ったけどもう辞めるんだから下がりおろう…と、世の中がそつこつこつこつになって、ちゃんと今度の国連総会に間に合うように、国連総会とAIEA (International Atomic Energy Agency) の総会に間に合うように日本での体制が出来た。—

を陰謀史観というのでしょうか、どこかにそういう中枢神経、あるいは司令塔みたいなものがなくて、こんなふうにことが進みますか。

ぼくは完全に陰謀史観になっちゃった。これも、知性の自由という問題があるから考えよう、というテーマですね。

■ ■ ■ 陰謀論者

IAEAっていうのはご存知ですよ。IAEAというものが出来た経緯もご存知ですよ。

もともとは、原子力みたいなものを実際に使う、つまり物理学者が実験室で何かをつくるっていうんじゃないくて、実際の社会のなかで原子力を使うということがどうやって実現したかっていうと、原子爆弾をつくるっていうことだったんですよ。たとえばさっきの発電所。発電所というのは巨大な、ものすごく大きな施設なんです。その発電所に至るまでの、ウランを採掘し、精錬して、それから濃縮をして、燃料体を作る。その過程にもものすごく大きな、大きな大きな社会装置がある。物理的にも大きい。もちろん、そこに携わる人間もたくさんいる。それから、発電所から出た使用済みの核燃料を処理する。処理をして、また兵器にも使うことのできる恐ろしいものを、怖いものを分離させるとか。これもものすごい装置。こういうものを一九四五年に原爆が落ちるまえに一挙に作ってしまった。これはまさに戦争中だからできた。そこにはどれぐらいたくさんの企業が関わっていたか。そして、その企業を運転するための金は政府から出るわけです。例の TVA (Tennessee Valley Authority)、つまりテネシー川流域開発公社と同じ考え方なわけです。TVAと違うのは、そこで働いている人が、自分のやってる仕事の世界の破滅につながっている、ということを知りたくないということ。知っているのは、ほんとうに数少ない、賢い賢い科学者たちと、科学者たちを取り締まって、情報をほかの国にもっていかないように見張っている警察や軍関係者。そして、その全体像を把握して、恐ろしい力を握っていたのが、大統領であったと。

その体制は、戦争が終わったらいらない、という具合にはならなかった。広島や長崎に原爆を落とす遥かに前から、次にはロシア（ソ連）にこの情報をどうやって渡すべきか、ということを一生涯懸命に考えた。結局は渡さない、という

ことに決まったけれど、渡したほうがいいと言ってる人たちもいました。それは、どうせ強い国がそれを持つことになる。強い国同士の戦争にならないためには、お互いはじめから手の内を見せておいた方がいいと。まあ、大ざっぱに考えればそういうことです。しかし、手の内を見せようが見せまいが、怖いことには変わらない。そうすると、『週刊文春』のついでに、あの黒塗りを見て、じつはたいしたことは書いてないのかもしれないけれども、でもその延長線上に、恐ろしい、んでもないことがあることがわかります。

アメリカ「合衆国」の核開発体制が戦後どんなふうになっていったか。それはもう仕方がないから、原子力を使うという、その技術をどんどんどんどん高めていく、その道を選ばざるをえなかった。それも、すぐに、アメリカ一国だけではできないから、ソ連を封じ込める形で包囲網を作ろう。要するに核技術を自由主義、資本主義の国々に行き渡らせちゃえと。ただしそれが、たとえば日本みたいに連合国に恨みをもってる国が悪い方向に使わないように、つまり核兵器に転用しないように監督、監視をしようと。それがIAEAだったんです。

もうお気づきだと思いますが、核兵器を使ったり、原子力発電所を動かすことによって膨大な放射能ができますよね。放射能なしの原子力なんてありえないわけで、それは必ず健康に害を及ぼすということがわかっていますから、害を及ぼすということを出来るだけ多くの人に知られないように、原子力発電は安全だよ、核兵器さえも安全ですよと嘘をつくしかなかった。核兵器は破壊はするものだけれども、残留放射能とかは考えない、考えさせないことにしたのです。大気圏内核実験というのはアメリカだけでも1000発近くやったでしょう、アメリカの国内で、ですよ。ピキニばかりじゃない。その放射能が降ってくる風下の人たちが、自分たちのそばで害になることをやられちゃ困ると思うでしょう。それを黙らせるためには、放射能は心配する必要がないと宣伝、洗脳をしなきゃいけない。そうしなかったら、核兵器を持つことなんてできない。原子力発電所を持つことはできない。

そんな恐ろしいことをするはずはない、と皆さんは思うでしょう。でも、どう考えても、わかっているやっつてるようにはかと思えない。そこで、さきほどIAEAについての資料をお配りしました。これを見ていただくと、なるほどそうかとわかっていただける。つまりどういふことかという、原子力に関することは健康問題だろうが何だろうが、すべてIAEAが管理する。それ以外の国際機関には、WHO (World Health Organization) にも、一切口を出させない。

そういうことなのです。

どちらにしても、これはどういうことなんだろう。さっきの「原子力村」の延長線上で考えて済むことなんだろうか。済むわけありませんよね。

というので、もうあまり時間はないですが、『核を求めた日本』というNHKの番組をご覧になった方いますか。あの番組は長いので、その番組を報じる去年の10月ぐらいのNHKニュースがあり、これは本当に短くまとめているので、こちらを見てみようと思います。(スクリーンに、ニュース映像の投影)

アナウンサー……一九六〇年代の後半、日本政府が核兵器の保有について極秘裏に検討を進めていたことが、NHKが入手した秘密資料からわかりました。当時の西ドイツとの間で、核をめぐる秘密の外交協議を行ったことが記されていて、核兵器をもたないという非核三原則が定着するまでの経緯を示す新たな事実として注目されています。ナレーター……これがNHKが入手した、ドイツに残されていた西ドイツ外務省の機密資料です。一九六九年二月、箱根の旅館等で、西ドイツと日本の間で秘密の外交協議が行われていたことを示す記述などが残されています。この協議の五年前、中国が核実験に成功し、アジアで初めての核保有国になっていました。このころNPТ核拡散防止条約が提唱され、経済発展を遂げた日本や西ドイツなどが核兵器をもたないよう促されました。秘密協議はこの条約の発効を翌年にひかえ、日本側が西ドイツ側に呼びかけて行われ、それぞれの外務省からあわせて一人が出席しました。秘密協議のなかで、日本側は、中国に続いてインドが核を保有するようになりアジアで核保有国が増えれば、日本の立場が危うくなる。日本の技術は核兵器を作るのに十分なものだと、核兵器を保有する可能性を示し、西ドイツ側に協力を求めました。これに対し西ドイツ側は、敗戦で国が東西に分断された現状で主体的に判断できる問題ではないとして、日本に協力することは難しいと伝えていました。秘密協議に出席した日本側の外交官の一人、元外務事務次官の村田良平さんは、今年三月に亡くなるまえ、秘密協議の目的について次のように話していました。

村田良平氏……なんとか核兵器をもてるきっかけを作るよう努力すべきと、これは思いましたけど、さりとて具体的に

NPTの会議で、そんなの提案できませんからね。全部「大国の」裏取引ですから。「西ドイツと」意見交換をずっとやって、そしてなんとかこれを覆す方法がないだろうかと…

アナウンサー…秘密協議が行われたのは、日本は核兵器を持たないという非核三原則が国是として定着して行く過渡期のことでした。核政策や日米外交に詳しい専門家は…

春名幹男氏（名古屋大学大学院特任教授）…核兵器がもてるんだというようなことを西ドイツと話し合っていた、ということを示す文書は、非常に驚きだと思います。国内的なコンセンサスを形成するのにもですね、相当時間がかかったんだなあ、その中で外務省の中にはこういう考えの人さえいたんだな、という意味で、過渡的な経緯なんだと思います。

と、こういうことがあった。ただ、過去こういうことがあった、過去にこういう人がいたんだ、というふうには考えない方がいい。それは、たとえば石原さんという人がいますね、石原慎太郎さん。あの人は、日本は核武装するべきだと、最近になって言っているわけじゃないんです。ずいぶん前から言っています。都知事もひよっとしたら終わりがなあ、というふうになって、去年ぐらいにも、核武装しなきゃダメだよ、ということ言っていた。それで皆さんご存知のように、四月の一〇日かな、彼がまた都知事に、当選確実という速報が出て、そんなに嬉しそうじゃなかったけど、彼の第一声は何でしたか。それは、原子力発電所の事故はあったけれども、原子力発電は進めていかなきゃいけないんだと、そう彼は言った。その辺の言い方はいろいろ変わるんだけど、まあ彼はそういうふうに言った。

で、この八月六日のヒロシマ・デー。その前日の『毎日新聞』で『はだしのゲン』の中沢啓治さんと、ほかに二人ぐらの被爆者、女性と男性の、ものすごく優しい写真が載っていて、そのすぐ横に、スーパー・コンピュータを使えば核武装がすぐできるという、石原さんの発言が載っていたわけです。

そこで、たとえば『SAPO』という雑誌がありますが、ここはなかなかよくできていて、いわゆる保守的な考え方をもってる人たちに、日本では原子力発電をこれからどうやって扱っべきか、という意見をきいているんです。それを見ると、櫻井よし子さんが、原子力発電をいま放棄してしまえば国家の安全保障につながる核技術というものを維持で

きない、と言っているわけです。

その櫻井よしこさんが、木村太郎さんといっしょにゲスト出演したフジテレビ系のM・r. サンデーという番組が、この四月一六日だったかにありました。(VTRをスクリーンに映す)

チエルノブイリ周辺の地図とSPEEDIで描いた福島汚染地図とか比較されていますが、「同縮尺と見ると」福島放射能汚染の範囲が、チエルノブイリよりもずっと小さいといっています。が、「同縮尺」なんていうのは嘘ですよ。ぼくが作ってみた同縮尺の地図と比べてみてください。(チエルノブイリ周辺の汚染地図と福島汚染地図をスクリーンに投影)

ひどく違つてでしょう。この番組の意図が、福島状況がチエルノブイリよりもずっと小さく、大したことがないと、視聴者に信じ込ませることにあるのは明白でしょう。櫻井よしこさんは、これについて何もコメントしていませんが、その同じ櫻井さんは、一八年前に、チエルノブイリ周辺の汚染地からの報告を、キャスターとして紹介していたのです。一九九三年五月にあった「チエルノブイリ特集第三回原発汚染地の生活」という日本テレビ系の番組です。そこでは、広河隆一さんが現地で撮った、甲状腺がんの手術をつける子どもたちでいっぱい病院や、重松逸造氏が責任者となったIAEAの調査団が、現地状況などまるで把握していないことなどが語られていて、櫻井さんは、だれの目からも、広河隆一さんの側、現地の人々の側にたっているように見えました。(VTRを見る)

櫻井…広河さん、こうして見ますとね、国際原子力機関が住民の影響に問題ないと発表したのは、一体なんだったんでしょうかね。

広河…VTRの中でも名前が出てましたけどね、調査団長は重松さんっていつて広島学者なんですね。

広河…国連の機関、しかも広島島の医学者がリーダーになったから公正な調査があると信じてたのに、安全だと発表しただけで現地の人々は唖然としています。

櫻井…ただ調査団の人たちは、現地の情報を見たんですか？

広河…現地のお医者さんの話では、汚染がひどいところには入ってないそうなんです。しかも遠くから、食料を持



参して現地のを口にしないで、それでいて安全宣言をしたことで、すごい怒ってたんですね。怖くて、それで食べられないんだったら、危険だといふべきなんです。

櫻井…もう、この国際原子力機関の信用性そのものが、深刻に問われてるわけなんですな。

IAEAの調査団のことが語られていますが、その調査をしたという国際諮問委員会の委員長だった重松逸造は、BOC (Atomic Bomb Casualty Commission : 原爆傷害調査委員会) の流れをくむ放射線影響研究所理事長だった人です。住民には放射線による健康被害はない、精神的ストレスからの問題のほうが大きい、という報告を事故五年後にだしているんです。その後のチェルノブイリの調査には、同じく放射線影響研究所の理事長だった長瀬重信という人物が登場し、これもとてもない過小評価だと思いますが、六、〇〇人ぐらいの小児甲状腺がんだけが認められたというのです。今、福島県の放射線健康リスク管理アドバイザーであり、福島県立医科大学の副学長にもなり、原発事故の健康影響調査の権限をもつことになった山下俊一という人は一〇〇ミリシーベルトまでは安全だと言っていました。放射線影響研究所の重松、長瀬につながる人物で、やはりチェルノブイリの健康調査や医療に candide、IAEAの側にたつ過小評価に貢献している。こういう人たちが大きな力をもつ社会になってしまっている。このことをわれわれの知性は、どうとらえればいいのか。考えなくてはならない深刻な問題でしょう。

櫻井よしこさんですが、このテレビ番組でキャスターをつとめていたときから一八年たって、福島原発の大惨事を目のまえにしているはずですが、ほんとうに一八〇度ちがう立場をとっているように思えます。私は、国家主義者ではありませんが、原発問題については、とうとう櫻井さんのような国家主義者とも、国の安全保障と放射能汚染とをめぐって話をしなければならぬ、そうしなければ私たち同じひとつの社会の問題を解いていくことができないことが明らかになってしまった。

いずれにしても、私たちの知性が直面している問題は、現実の放射能汚染であり、それを引き起こしてしまった原子力発電の現実です。また、放射能の危険を隠しつつけよとする勢力、自国でも原子力兵器開発を目指す勢力を、私たちの知性は、どのようにしてとらえようとしているのでしょうか。

はじめの問題提起、つまり「目の前の社会状況のなかで、どんなふうにして自分たちが不自由になっているのか」ということを、まず反省しよう」ということは、少しできたのかもしれない。

■ ■ ■ 質疑応答

古賀節子さん…このような画像はどこから手に入れているのでしょうか？私のような年輩の者たちなど、これらを手に入れられない人たちがたくさんいると思います。

中尾先生…ごらんいただいた映像は、すべてYouTubeという、ネット上で画像を配信しているところからの、無断拝借です。たしかに、コンピュータ情報社会にはデジタル・デバイスと呼ばれる、情報弱者を作ってしまう壁がありますね。これも放置できない問題でしょう。

児玉英靖さん…京都から来たのですが、東京発の報道と違って、関西では、たとえば青山繁晴氏の「アンカー」が福島第一原発からの現地報道をいち早く報じたり、やしきたかじんの「そこまで言って委員会」が好き放題やっていたりします。大きくなりすぎた東京の大手メディアの限界が、今回の震災報道にあるのではないのでしょうか。一方で、インターネットによって情報の流れが変わったとも言われますが、一部の真実を伝えるウエブページ、たとえば児玉龍彦先生の参考人意見陳述のYouTubeの映像に数十万回のアクセスがあっても、それが一億三千人に見られているわけでも届いているわけでもない。ソーシャルメディアの意義と限界をどう考えておられますか。

中尾先生…青山繁晴氏の「スーパーニュース・アンカー」については、とても問題がある番組だと思います。青山繁晴という人は、原発自体には問題がなく、政府をはじめ人間の判断や操作が誤っていて事故故になったのだと主張することが、役割になっているでしょう。かなりはつきりと国際的原子力推進勢力の側にたっているように見えます。そもそ

も関西には、関西電力という強大な経済権力が存在します。私のいる京都精華大学での講演会を関西テレビが取材しようとしたことがあります。あの大学には反原発の槌田劭という人物などがいるからという理由で、その企画が没になったことがあります。やきたかじんの「そこまで言って委員会」も自由というわけではありません。読売系は原子力推進のためのメディアとして一九五〇年代からずっとやってきているんですから。

インターネットについてですが、何であれメディアを通さずに物事を知るということはできない。困ったことなのだけれども、これは今にはじまったことではなく、だからこそ「情報」というほんとうに面白くもないことばが、これほど使われることになってしまったのでしょうか。

いわゆるソーシャル・メディアというのは、本当の意味で社会的なことを起こしません。起こしてもせいぜいフラッシュ・モブのようなことでしょう。その程度です。本当に社会的なテーマについての考えを伝えあうということのために使われるかというと、疑わしいですね。わかりあっている人たちであれば、ツイッターみたいなもので、やりとりをしたらいいんですけども、そんなことをしている暇があるなら、別のことをしたほうがいいのではないかと思います。

それでは何をするのかといえば、古いスタイルでやるしかない。古いスタイルで何をといえば、まずデモだとか、署名だとか。しかし、デモでも署名でも、昔みたいな組合単位で動員できるようなことは無くなってしまいました。それはそれで健康だと思つのですが。そうすると、組織で動くということではなくて、ある意味で大人になった市民が、共通の目標を掲げて、同じ行動をするという、ものすごく古い古い運動のイメージだけれども、それ以外ないのではないか。

情報についても、それはもう昔みたいなことにはなりませんよ。たとえば、どこかのセクトが打ちだすことをイデオロギーとして多くの人がコダマのように反唱することによって運動ができるということは、幸いなことかもしれないが、もうないのです。だけれども、人びとが話しあわないことには、運動などできません。運動ができないということとは、すでに立派な運動として成立している原子力の帝国がどんどん動きつづけるということになる。「原子力帝国」ということは、私はいいと思うのです。私たちは、いつのまにか帝国の住人になってしまったという感じも表せるの

でね。

いめんなあ。いぢやうが、まじつた答えはないです。

二〇一一年九月二十四日（土）一五時～一七時
立教大学池袋キャンパス一〇号館X二〇一教室